歳時世相篇

①

【入社式】

変わりゆく日本企業の風物詩

中牧 弘允（なかまき ひろちか）
本館民族文化研究部

会社では四月一日に一斉に入社式がおこなわれる。官庁の辞令交付も同様である。小学校に「ピカピカの一年生」が全員顔をそろえるのはもう少しあとだが、この時期、会社も官庁も新人をむかえてスタートをきる。世界でもめずらしい日本の春の風物詩といってもいい光景だが、昨今、そこにいくつかの異変が生じている。

くりあがる入社式

まず四月をまたずに入社式をすませる会社が出はじめた。有名なのはセブン&アイ・ホールディングスであり、三月の中旬にすませてしまう。入社式をくりあげるのは、新人研修を早急に開始するためである。卒業生をブラブラさせておくのはもったいないといわんばかりだ。新入社員は唯一卒業式に出ることだけがゆるされる。おわれば即日、すぐにもどって、ふたたび研修の日々が続く。

入社式そのものは四月におこなっても、それに先立って実質的な新人研修に入る会社も増えている。たとえば二月一日から週三日の研修を課す会社があるが、内定者にとって、卒業旅行と称する長期の海外旅行は絶望的となる。

訓示で謝罪するトップ

入社式の当日の夕刊、あるいは翌日の朝刊に、新聞各紙はこぞって有名会社の会長や社長のあいさつをとりあげる。訓辞のなかに会社の現状認識が凝縮され、あるいは企業風土が誇示され、読者の関心をひきつけるからである。しかし、最近は、事故や不祥事をおこした会社の入社式をあえて報道する傾向が見られる。昨年の紙面からひろってみよう。

尼崎で福知山線脱線事故をおこしたJR西日本では、入社式に先立ち、犠牲者に黙祷がささげられた。そして事故後改定された「企業理念」と「安全憲章」が全員で唱和された。番組の捏造問題でゆれた関西テレビでは、引責辞任を近々発表する見通しの社長が「皆さんにとって大事な人生の節目に大きな問題を引きおこし、心配や不安を与えて申し訳ない」と沈痛な面持ちで語っている。

強調される企業の社会的責任

トップのあいさつで近年とくにめだつ傾向は企業の社会的責任（Corporate Social Responsibility）である。市場経済優先主義のゆきすぎに対する反省が企業の社会的責任の問題にはねかえっている格好だ。CSRはアメリカではエンロン事件がひとつのきっかけとなり、日本でも雪印乳業などの不祥事で浮上した。経営学でいうところのゴーイング・コンサーンとは継続事業体としての社会的責任だが、CSRは企業の経営倫理や遵法（じゅんぽう）精神にかかわっている。とくに経営トップの責任が重いといわれる。

やはり去年の訓示からひろってみると、キヤノンの社長は「社会の規範となる行動を」と述べ、東レの社長は「法令順守でしっかりした心構え」を説き、伊藤忠の社長は「嘘をつくな、悪いことをするな」と単刀直入に切り込んでいる。日立の社長は「よき会社人である前によき社会人であれ」と呼びかけ、ソフトバンクグループの代表は「今日をきっかけに社会を支えていく一員として自分を高めていってほしい」とうったえた。

リストラされる入社式

かつてソニーの故盛田昭夫会長は入社式でかならず「早期退職のすすめ」を弁じていた。ソニーが自分の希望や体質に合わないと感じたら、すぐに退社すべしと力説したのである。そのほうが個人の幸福にとっても、会社の経営にとっても幸せだとの判断からだ。しかし同時に、退職のとき、人生のもっとも大切なときをソニーにささげてよかったと思えるようになってほしいとも述べていた。

昨今、IBMは「就社」ではなく「就職」であることを徹底させるため、入社式ということばを用いず、「スプリング・キックオフ」という名称を使うようになった。春のキックオフで会社のゲームがはじまるという想定だ。

入社式のない会社も存在する。ライブドアのように新卒一括採用をしないところに入社式がないのは当然としても、大手でも入社式をやめたり、その存続を検討したりする会社が出はじめている。財政難にあえぐ大阪市は昨年から五年間、入庁式を凍結した。一部専門職と身障者の採用をのぞき、新入職員を採らないからである。日本独特の伝統である春の式典は今や岐路に立たされている。企業も官庁も、入社式や入庁式につめたい視線を浴びせはじめているからである。

2008年セブン&アイ・ホールディングス入社式（写真提供＝共同通信社）